石山貝塚

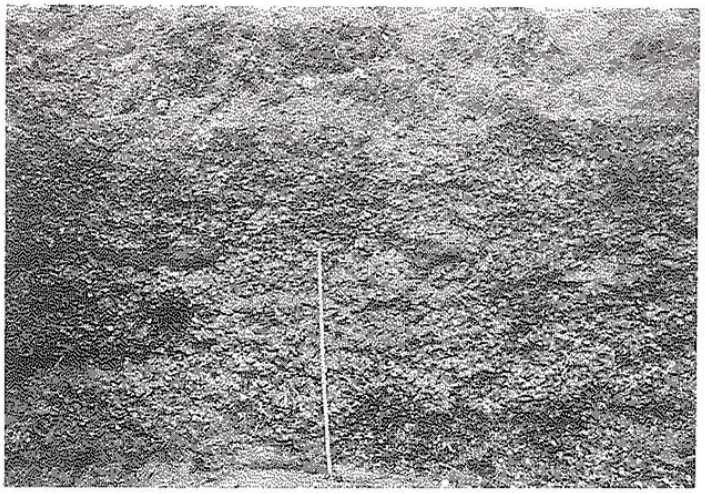
貝塚とは、石器時代の人たちが食べたあとの貝がらなどが推積した遺跡を言います。石山貝塚は、大津・石山寺の門前にある貝塚で、近畿地方では数少ない貝塚の一つであるとともに、縄文時代早期の貝塚としては、規模の大きいことで有名です。その貝層の厚さは最深部で約2メートルあり、その広さも南北40メートル、東西約10メートルにわたるものです。東は今は人家で削られていますが、もとは瀬田川畔まであったようで、北へももっと延びていたものと思われます。この貝塚は、伽藍山(がらんやま)の谷水が瀬田川に注ぐところにできたもので、当時の人々は瀬田川の水の幸、伽藍山や対岸の山の幸にめぐまれた環境の中で生活を楽しんでいたのでしょう。では、その生活の様子を貝塚の出土遺物から考えてみることにしましょう。

食　料

石山貝塚を形成している貝は、セタシジミ77.9%、ナガタニシ12.5%、オトコタテボシ4.6%、マツガサガイ 2.9%、イボカワニナ1%、セタイシガイ 0.9%その他で、セタシジミを主とした貝塚であることがわかります。これは、当時の人々がここで貝を捕食した状態を示すもので、この貝層中に含まれていた背推動物の遺骸とともに、当時の食料に関する重要な資料です。貝層中の背推動物の遺骸をみると、哺乳類ではシカ、イノシシ、クマ、サル、タヌキ、ウサギ等があり、魚類ではコイ、フナを中心として、しかもそれらは非常に大型のものが見られ、また、鳥類やスッポン、イシガメ等の遺骸もありました。なお、イヌの歯が発見されていることから猟犬の存在が考えられます。植物性の遺物は非常に少なく、炉中に炭化した少量の木の実が見つかっている程度ですが、食用に供せられる植物が多かったであろうことは推測に難くありません。

道具と住居

それでは、当時の人々はどんな道具を使いどんな住居に住んでいたのでしょうか。道具としては、石器、骨角器、土器があります。打製石器には、石鏃・石錐・石匙など形をととのえたもののほか、打製石片の一辺に刃をつけただけの刃器も数多く発見されています

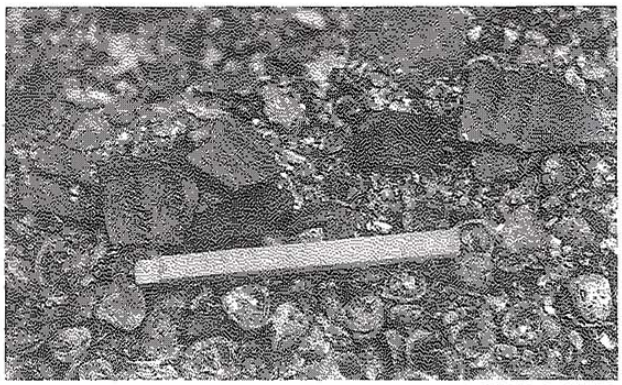


貝　層

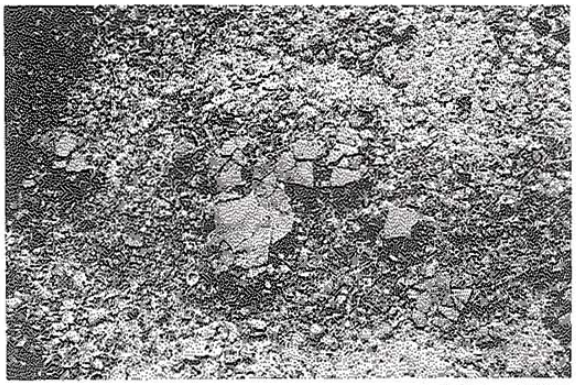
○発掘状況

52. 2. 28

財団法人　滋賀県文化財保護協会



土器出土状況



土器出土状況

それらは大部分がサヌカイト製で、チャートや水晶製のものが数点含まれています。このうち水晶を除いては、このあたりには産出しない石ですから、それぞれの石器原石の産地から運ばれたものと思われます。磨製石器では石斧・磨石・錘石があります。錘石は扁平な小礫の両端を打欠き漁網の錘に使用されたもので、錘にはほかに土器片を楕円形にして両端に凹みをつけた土錘もありました。

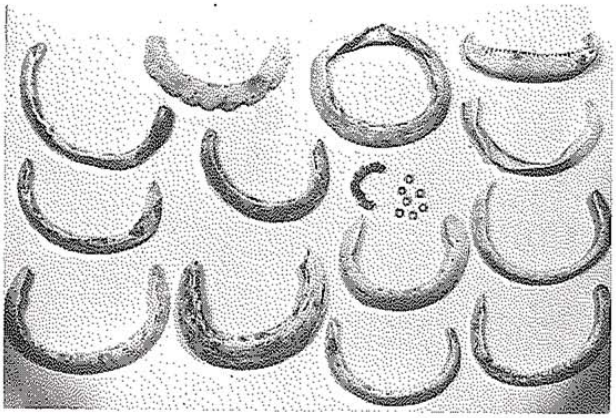
骨角器では、骨を加工した刺突用の尖頭器や骨鏃・骨針などがあります。また、鹿角斧が２個発見されました。鹿角斧は鹿の角を柄にしてその第１枝に刃をつけたものですが、刃の方向が、一は柄に対して平行であり、他は直角になっていて、用途によって刃のつけ方を工夫したものと思われます。

土器は、底の尖ったいわゆる尖底土器が多いようです。器面に施された文様は、その遺跡の時期を知るための大切な資料ですが、この貝塚から出土した土器は、大部分が条痕文系のもので、縄文を施したものは少なく、また下層からは押型文を施したものも出ました。その文様の変化を下層から上層へ見ていくと、高山寺式・穂谷式の押型文系から、茅山式・粕畑式・上の山式・入海式・石山式と続く条痕文系の土器様式の層序が見られます。高山寺は和歌山県田辺湾岸、茅山は三浦半島、粕畑・上の山・入海は東海地方の貝塚の名称で、穂谷は大阪府枚方市の遺跡名です。生活用具としての土器は、縄文早期ではほとんど煮沸器であったようで、尖底になっているのも炉の礫の間に突き差して煮沸するのに都合がよかったのでしょう。

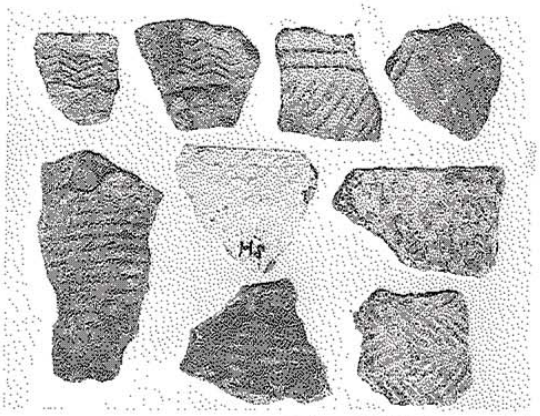
煮沸するための炉は、貝層の中に幾つも発見されています。すべて、礫を不正円形に並べたもので、礫も炉の大きさも、大小いろいろありました。縄文時代の早期では、炉は住居の中に造るのではなく、別の所に造っている例が多く、石山貝塚でも住居外に炉を造っていたのです。また、貝層の中に火で貝殻が

炉と土器出土状況

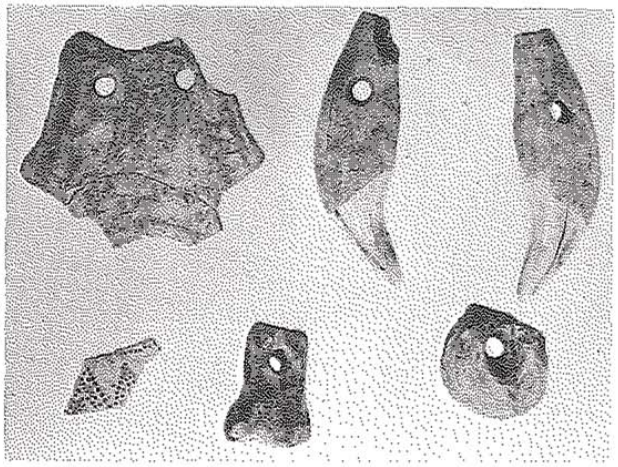
焼貝遺構



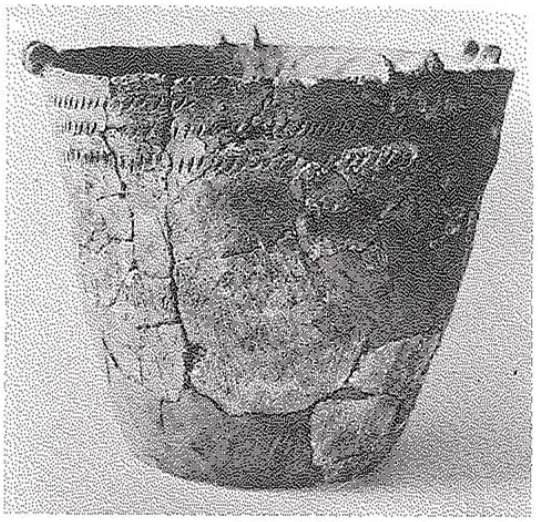
貝輪・貝製首飾



土器片（押型文・縄文）



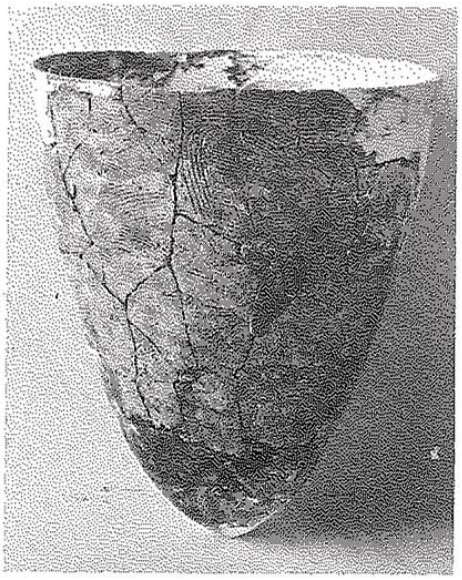
骨牙製装身具



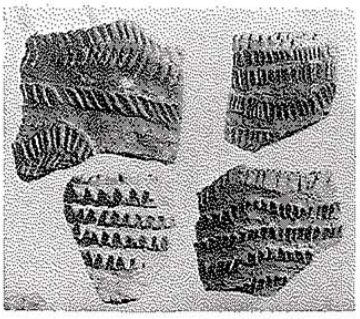
土器（粕畑式・底部欠失）

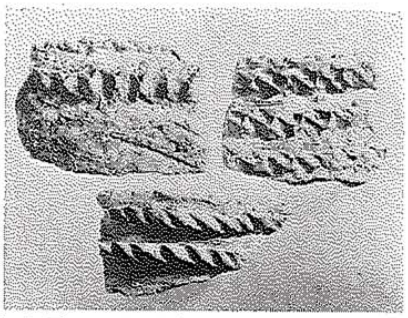
土器（茅山式・底部欠失）

※土器（入海式）



土器（石山式）



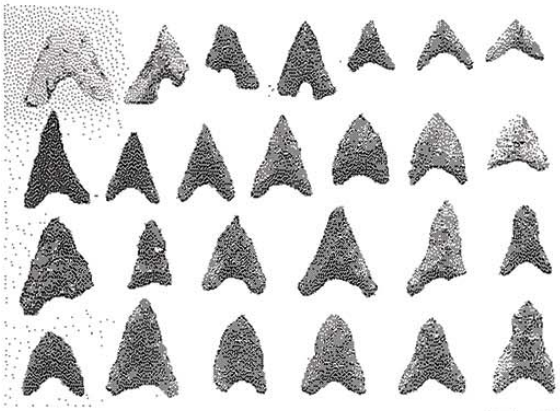


土器片（条痕文系の口縁部）

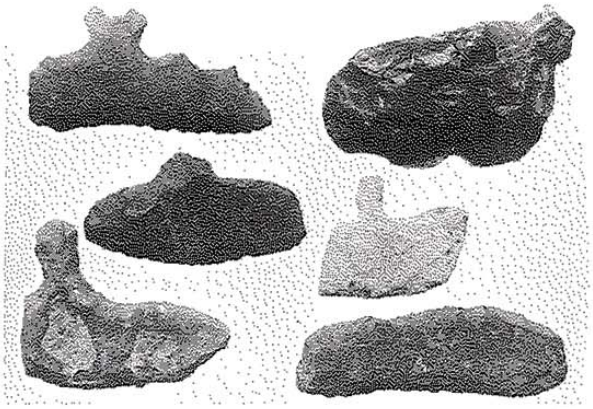
○前野隆資氏撮影

※平安学園考古学クラブ編

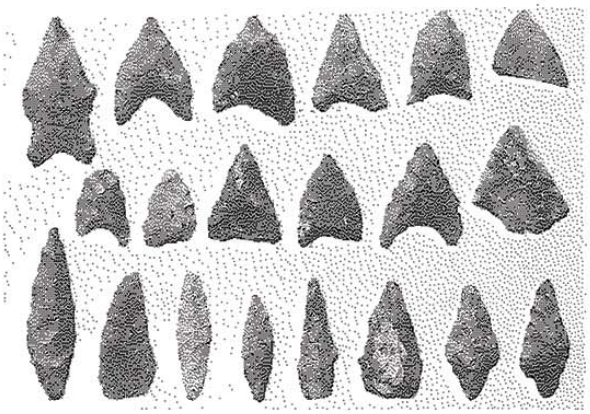
「石山貝塚」より転載



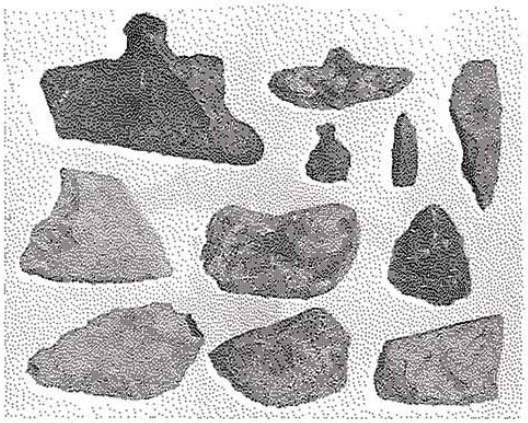
※石　鏃



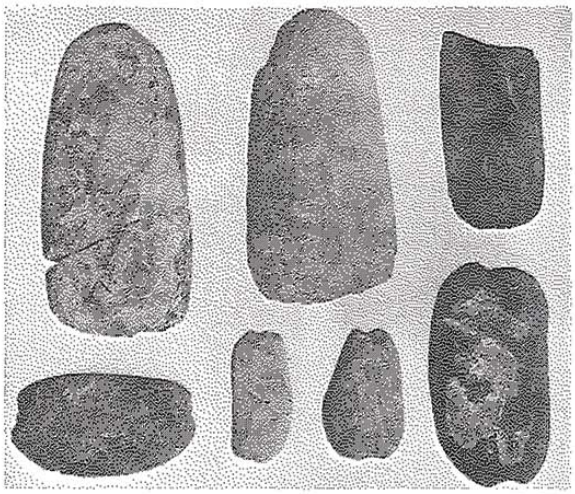
石　匙



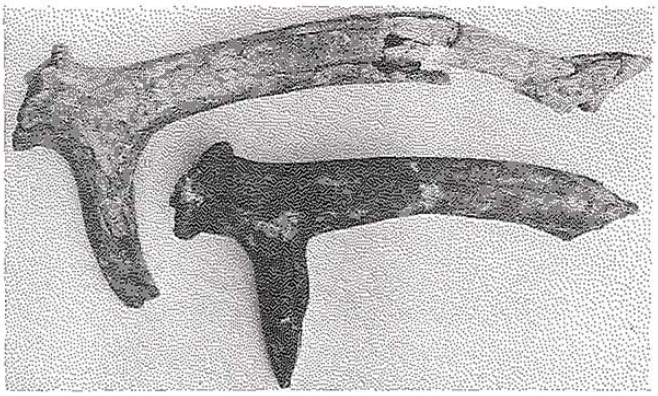
※石鏃・石錐



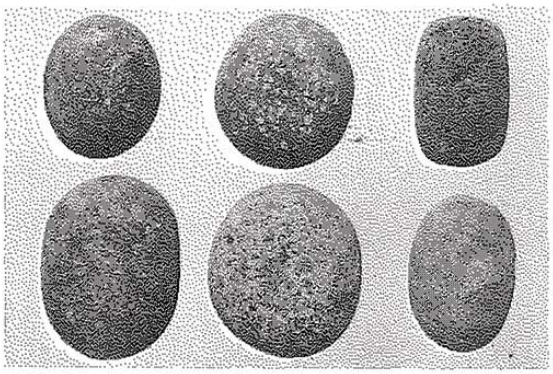
石匙・刃器等



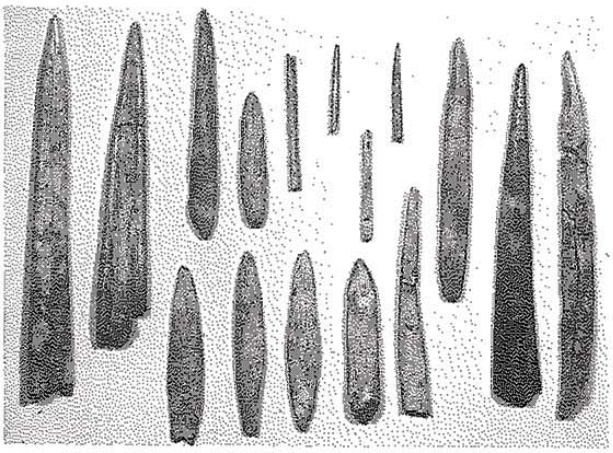
石斧・錘石



鹿角斧



※磨　石



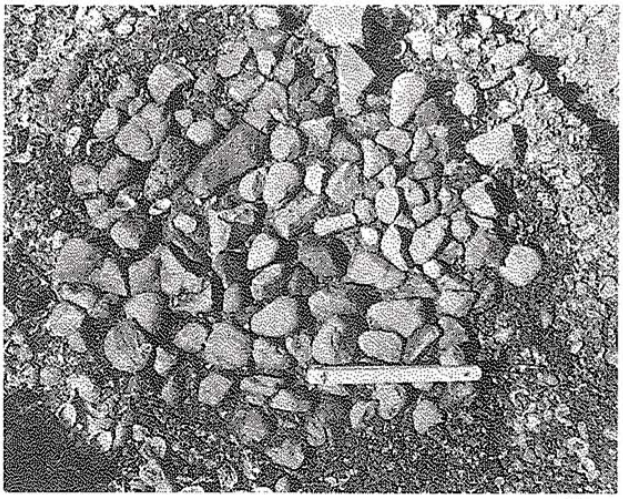
骨製尖頭器・骨針等

焼き固まった遺構があることから、礫を並べずに貝層面で直接に火を使ったこともあったと思われます。この焼貝の層は、相当長い間火にあたっていたらしく、非常に固くなっていました。また炉の上に鹿の角が置かれた遺構が一例ありましたが、これは何か特別の意味があったのかもしれません。

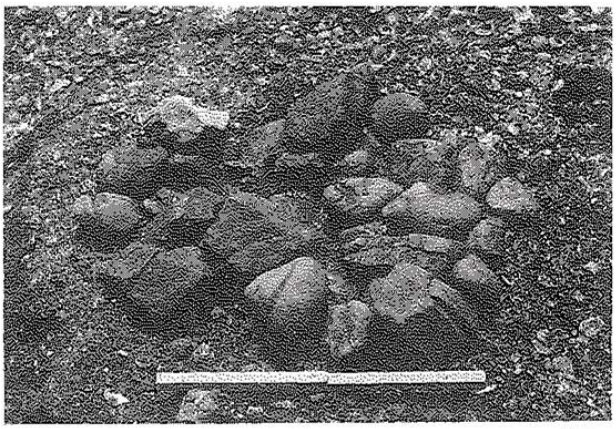
次に住居について触れたいのですが、残念ながら石山貝塚では住居跡が発見されていませんので、住居がどんな状態であったのか不明です。

人骨と装身具

この貝塚に見られる葬法や装身具は、当時の人々の思想や宗教を知る重要な手掛りになります。人骨は貝層中に4体、貝層下の土層に掘り込んで1体見つかっていますが、すべて屈葬されていました。貝層下の人骨は歯の磨滅が甚だしく、歯が単に食料の咀嚼(そしゃく)だけでなく、いろいろなことに使われていたことを物語っているようです。貝層中の人骨のうち1体は小児骨で、ヤカドツノガイを輪切りにした貝製の小玉を連ねて首飾りにしていました。このヤカドツノガイのほか、ベンケイガイなどで作られた貝輪も多く発見され、それらには装飾的な刻みが連続して施されているものもありました。これらは遺骸の腕にはめられた状態では発見されていませんが、他の遺跡の出土例から見て、腕輪であることに間違いありません。このような装身具としての



炉



炉

貝がすべて海産のものであることは注目すべきことです。

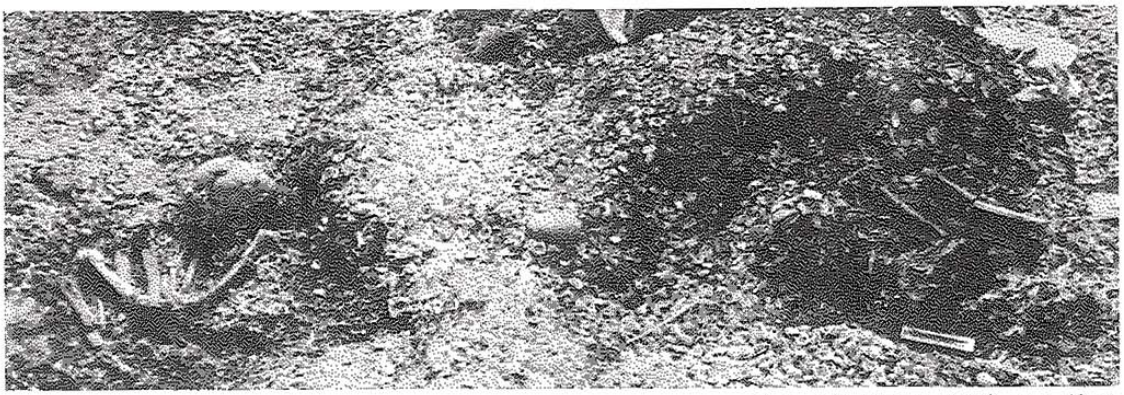
装身具には貝製品のほか、牙製や骨製のものもあります。その中には、小さい点を鋸(きょし)歯状に焼き連ねているものや、鋸歯文を彫刻したもの、牙に穿孔した勾玉状の垂飾などがあって、縄文時代早期の遺跡としては装身具が非常に豊富であるといえます。このような装身具が単なる飾りではなく、それをつける人にとって特殊な意味を持つものであることは、これまでもいろいろと論ぜられていることです。

む す び

以上、石山貝塚について概観しましたが、豊富な装身具の出土があったことは、貝塚の規模の大きいことと共に、石山貝塚の文化の豊かさをしのばせます。また、装身具に海産の貝が使用されていることや、石器の原材料が現地産のものでないことは、他地域との交流が盛んであったことを物語っています。さらに、出土土器の様式からも広い文化の交流が考えられ、縄文時代早期のこの地の文化を知る重要な手掛りをこの石山貝塚は与えてくれているのです。

この地方における縄文時代の貝塚遺跡には、石山貝塚のほか次のような遺跡があります。
螢谷貝塚（前期）、粟津湖底貝塚（中期）、南大萱善念寺境内貝塚（時期不明）、滋賀里遺跡（晩期一遺跡の一部に貝塚がある）

（西田弘氏提供）

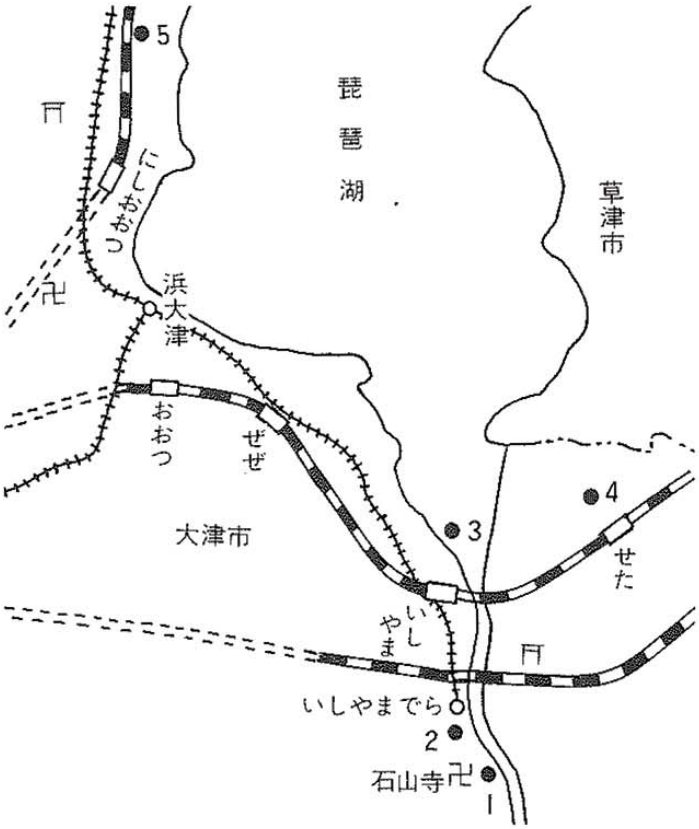


人骨（貝層中の２体）出土状況

人骨（貝層最下層）出土状況

小児骨出土状況

○鹿角を置いた炉



貝塚位置図

１．石山貝塚　２．螢谷貝塚　３．粟津湖底貝塚
４．善念寺境内貝塚　５．滋賀里遺跡